

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27120 日本の「外」から日本の「内」を眺めると、何が見えて、何が見えなくなるのか考えてみましょう



開催日：平成27年7月30日(木)

実施機関：早稲田大学

(実施場所) 26号館402室

実施代表者：保崎則雄

(所属・職名) (早稲田大学 人間科学学術院教授)

受講生：中学生23名

関連URL:

【実施内容】

本ワークショップ実施に当たっては、将来、中学生の参加者が海外で学ぶ、働く、活動するという事に現実的な関心を持てるように協働的なグループ活動を中心にデザインしました。科研での調査結果でわかった以下の3つのこと、1)言語習得は、意味ある活動と連動して生起すること、2)海外で気づく事、学ぶこと、対象文化の認知と理解において、一定期間居住することで生じ、3)居住期間の長さによってそれは変化し、ある一定期間(3年ほど)を超えると、その変化が緩やかなカーブになっていくことなどを盛り込みました。さらに、それらの知見を、中学生、そしてなによりも当日、中学生と同様に活動に参加してくれた、保護者の方々に対しても、できるだけわかりやすく伝えるために、2名のゲストスピーカーの講演、海外在住経験のある協力学生のグループ活動参加を企画し、実施しました。

以下、大まかな時系列での当日の活動について重要点を中心に報告します。

《9:30～10:00》受付とグッズの手渡し

《10:00～10:15》開校式(主催者挨拶、オリエンテーション、科研費プロジェクトの説明、協力者紹介など)

《10:20～10:50》互いを理解し、うちとけるために、身体コミュニケーション活動の実施

この活動では、協力学生2名が中心となって、グループ内の互いの紹介を兼ねて、少人数のグループに分け、協力をしなければ活動が成り立たないようなゲーム性を持った身体活動を行いました。男女差、学年差、地域差などがある中学生でしたので、まずはお互いを知ること、互いに紹介しやすい4、5人の少人数のグループになり、与えられた課題遂行の活動をすることを心掛けました。

その効果があって、次からの活動に移るときにすでに仲間意識も芽生えて、互いのある程度知ることができたようです。この活動の様子は、11名の保護者の方々も観察していて、ときに、参加もしてもらい、会場全員(視察官の先生も含めてです)が同じ方向を見つつ、異なった意見、アイデアを出し合うという、私に取っては日常大学の授業でも行っているスタイルで終日行いました。

《10:50～11:20》青谷優子氏の話 タイトルは、「To Go or Not To Go 外から知る日本 世界・自分を知る留学」というもので、最後は質疑応答の時間も取れました。幼少時から高校生まで英国に住んだ青谷氏の苦勞、生き様、当時考えたこと、今振り返って考えていることにつながる話で、参加者は、中学生のみならず、保護者(11名)の方々にも大きな意味があったようでした。留学、海外居住が必ずしもバラ色の面ばかりではない、辛いこと、悲しかったエピソードなどを織り交ぜた話だったので、中学生もよく理解できたと思います。さら

に、3月までNHK国際放送のキャスターを20年以上されていた青谷氏が東北大震災時に経験した無力さ、言葉の意義、生きる言葉の体感、などについて事例をあちこちに交えて、話したことは、参加者にとっては想像以上のインパクトがあったようでした。また、事後の保護者からのコメントでもそのことが明らかになっており、留学＝言語習得 というおきまりの構図とは異なった概念に触れたことは、大いに効果があったようです。

《11:30-12:30》大学食堂にて昼食

実施者としては、昼食がまた大きな意味ある活動にしたかったので、まず、協力学生に食堂まで案内してもらいつつ、各テーブルに保護者、参加中学生、協力学生、講演者(青谷氏)そして、時間が許す限り、実施代表者も加わって会話をしつつ(少々三者面談、留学相談の色合いもありました)、なごやかな雰囲気の中で昼食時間を過ごせたことには、意味があったと思われます。中学生も、親と一緒にいると「本音」のような部分も見られ、親子関係もわかり、午後の活動に大いに参考になりました。また、当日の様子は、協力学生の2人に朝から終了時までビデオ撮影してもらい、この昼食時の様子も撮影しました。

《12:30-13:20》

鈴木広子氏の話 鈴木氏は現職である大学で現職教員へのワークショップなどを行っていて、中学校高等学校現場から知見を踏まえて、留学について話し、そして何よりもご自身の留学の経験を通して、気づいた事、学んだ事などについて話してもらいました。留学後の人生の選択についても、直接何が生きたという視点ではなく、生きていく上で、第二言語習得、generic skills が育成されたというようなことも指摘されました。留学をしてもなくても若いときに異文化体験の意味について、自分の経験のみならず、他の人の経験についても言ってもらいました。このことは、人生という長いスパンで海外に住むという経験をどのように取り入れるのか、入れないのかということを考える意味で参考になったと思います。事後アンケートのコメントでも、留学したくなった、という声は勿論多かったのですが、事後少々個別に中学生と話したら、行く、行かないという選択肢が対等になった、というような興味深いニュアンスで答えてくれた生徒がいました。

《13:20-14:00》

休憩時間 クッキータイムは設けましたが、終日を通じて、活動の途中でもトイレ、茶、クッキーなどは自由に使ってください、と伝えてあり、そのようなスタイルには最初少々戸惑った参加者でしたが、それも異文化体験と実施側は理解していたので、自由とマナーという学びにもなったのではないかと思います。

《14:00-16:00》

グループ活動 「自分たちの留学をデザインする」というテーマで7つの小グループに、協力学生が張り付き、もぞう紙、マジック、テープ、のり、ペンなどを使って図示しつつ、後の発表(もぞう紙を使ったポスター発表+デジタルプレゼンテーション)の資料を作成しました。この活動も協力学生には、国内外での学会発表などを経験している学部生、大学院生もいたので、適切にアドバイスができたことも中学生には大きな学びとなったようです。参加中学生は、それぞれの国、地域にそれぞれの目的を持った留学というものをグループ内で合意形成をしつつ、こだわりも入れて、デザインしました。この活動では、いろいろな話、情報を得たことを、今度は自分が主体的にデザインしました。実施者としては、誰かに紹介されたり、既存のプログラムの中から選ぶのではなく、中学生が自分たちで、予算を気にせず、目的を中心として企画するという点に大きな意味を想定していました。事後のコメントからも留学って面白そうだ、という意見が危険、犠牲になることも踏まえつつ、ということが意味があったのではないかと思います。さらに、その計画、希望が次第に形になっている様子を、保護者、視察官も時間経過とともに観察し、ときに中学生と対話しつつ行えた事は、非常に効果的だったと思います。若いときの留学には、保護者の理解、金銭的な援助というものが欠かせないことも事実ですから保護者も参加するというやり方は、当日朝、具体的に考えたのですが、それも良かったようです。同時に、日本国内、現地での奨学金を有効利用することもいくつか伝えられたことも、様々な経験者が実施スタッフに加わってくれたからだと思いました。

実は、この活動時間に別室で1時間ほど保護者11名に集まってもらい、実施代表者が経験談を適宜入れつつ、留学、海外在住、インターン、NPO活動などについて、質疑応答をしました。そこでは、子どもの留学という

視点、親の留学という話、進路のことなど実に多くの質問、コメントが出て、私も加わって意見交換ができたことは、非常に大きな成果でもありました。

《16:10-16:50》活動成果のプレゼンテーション

グループ毎に5分間程度で、前に出てホワイトボードにポスターを貼り、デジタルファイルを提示しつつ、それぞれが考える留学について発表し、1つ2つ質問を受けました。このような発表をこの会場(保護者、主催者、参加中学生、計50名弱)で行うことはかなりの緊張感もあったようですが、皆、わかりやすく発表できていました。アイデアを記述し、描画するという作業は拡散する思考を、収束する言語にする活動であり、その作業を通じて、より中学生のアイデアが具体的になり、他の人にわかってもらう形にする難しさ、面白さを感じたことではないかと思いますが、同時に思ったように伝わらない事も経験できたことと思います。

《17:00-17:30》振り返りの時間

視察官からの総評があり、活動の利点や、科研費についての意義等の説明がわかりやすくされました。朝の挨拶の後、活動を踏まえての説明だったので、会場に居た全参加者は一層具体的に科研費のことがわかり、中学生は、そういう研究もあるのか、ということが理解できたと思います。

その後、当日の全活動を、協力学生が撮影したものをすぐ編集し、(撮って出しという手法です)上映しました。その技術を持った学生に協力してもらったことが大きな効果ともなりました。参加者は、このような手法、技術も大学で習得することができること、得手を生かして参加者をエンターテインすることの意味も分かってくれたことだと思います。完成した映像作品は4分程度のものでしたが、著作権、肖像権の問題もあり、当日会場の上映ということで、一般公開はせず、実施代表者の研究室で保管ということになることをワークショップ始動時に説明して、了解を得ておいたことを付記しておきます。

活動全体を振り返って、事後アンケート、個別のコメントなどを通して分かったことは、参加者の理解、満足度は予想以上のものだったということでした。反省事項もいくつかあります。ひとつは参加登録者への受講確認の連絡でした。プログラム実施1週間前ごろに、欠席の連絡、参加の可否を確認するメールが相次いで来て驚きました。このことは実施者の情報不足でもあり、次回への反省事項です。

また、今回は中学生のみに絞りましたが、小学生、高校生という対象に広げると実施する内容がまた異なり、意味があるのかもしれないと思いました。進路という面では高校ですと、1年生、2年生1学期までということになるのかもしれませんが、2020年の東京オリンピック、国際化、などを鑑みると、海外在住、留学、インターンなどの活動をその時代に一度真剣に考えるという機会には意味があるようにも感じました。事後、参加者のコメントからも若いうちの在外経験は必ず将来の職業選択や生き方に影響を与えるのではないかなというようなものもありました。中学生と1日向き合っただけ楽しかったという大学生、大学院生のコメントも実施代表者としては、新鮮なものでした。1日を通じて、怪我、熱中症発症もなく、無事終了できたことは安堵の極みでした。

《事務局との協力体制》

事務担当者は、予算の執行管理、提出書類の確認及び訂正、プログラム当日の昼食の手配、レクリエーション保険加入手続き等を行い、参加人数やプログラム内容等の情報を実施代表者と共有しました。

《安全対策》

本プログラムでは、危険な実験を伴うものではありませんでしたが、暑い時期での開催でしたので、熱中症発症の防止に努めました。また、念のために、参加者、実施協力者はレクリエーション保険に加入しました。

《広報活動》

研究代表者が所属する早稲田大学人間科学学術院のHPにプログラム概要を掲載しました。

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 13名

【事務担当者】 研究推進部 研究支援課 仁平光政 所沢総合事務センター 総務課 三村知子